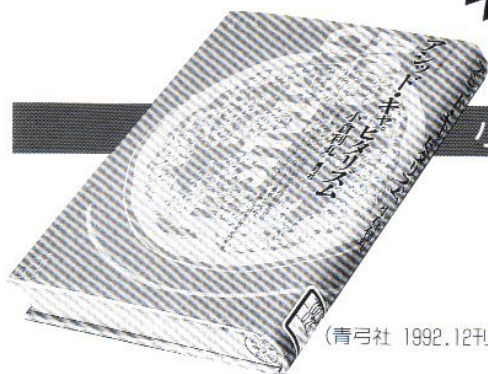


## この本を読んだ

①



### 小倉利丸著『アシッド・キャピタリズム』

(青弓社 1992.12刊)

『清貧の思想』がベストセラーになっているようだが、その刊行に先だち、ある雑誌で、ベストセラーになった「思想」とはまったく無関係に、けれどもどんな偶然の符合か、少年ナイフとあがた森魚が「清貧」をめぐって対談していたのだった。そんな事を思い出したのも、この『アシッド・キャピタリズム』に少年ナイフの名前を見つけたからで、それにしても「まぎれもない現代資本主義に対する批判を意図して書かれた」本書のような書物に、「その筋ではよく紹介され」ているとはいえ、やはりマイナーであることは否定し難いミュージシャンたちの名前が、かつてこれほど頻出したことがあっただろうか。

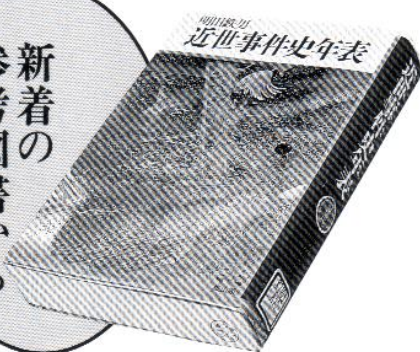
消費と情報をもたらす「快樂」をめぐって組織された現代の資本主義を「アシッド（麻薬的）」と捉える『アシッド・キャピタリズム』の著者は、「快樂の付与と剝奪」によって私たちに「資本を麻薬の売人とせざるをえない従属的なジャンキー」となることを強いる社会に対し、自らの欲望をコントロールしうる「自立したジャンキー」と

してのスタンスをとって対抗する。その実践として具体的にとりあげるのは、アシッドな資本主義の「快樂の罠」を最もよく体現している大衆音楽（なかでもパンクからノイズにいたるロック）であり、モダンアートであり、G・ドゥボール（『スペクタクルの社会』の邦訳が最近出たばかりだ）を中心としたシチュアシオニストの運動であって、つまり、こういった「文化闘争」の舞台としてのサブカルチャーの現場に、「左翼」たる『アシッド・キャピタリズム』の著者は「左翼的偏見」をもって、徹底してこだわりつづける。

この姿勢は、『ジャズ宣言』以来一貫してビバップ（これは半世紀前のパンクだ）の文体を駆使し続ける平岡正明が、『大歌謡論』から『新内的』『浪曲的』と、これもまたある意味ではいかがわしい大衆音楽の歴史を遡行してゆく際に見せる、いささか慎みに欠けるきらいがあるとはいえ、やはり「左翼的」とでも形容するほかないある種の生真面目な潔癖さを、つい彷彿とさせてしまう。いや、『アシッド・キャピタリズム』の著者の潔癖さは、むしろセックス・ピストルズの映画『ロックンロール・スウィンドル（詐欺）』で、「俺は金が欲しい、けれども金なんか糞くらえ」といったパンカーの科白のイメージと重ねあわせて捉えられるべきなのだ。つまりは「自立したジャンキー」としての。

(森 俊司)

新着の  
参考図書から



「年表」と聞くと中高時代の無味乾燥な歴史年表なんかを思い浮かべてしまうのだけれど、ここで紹介する明田鉄男編「近世事件史年表」は、そうした乾燥年表とは目指す所が全く違うのだ。宮人から庶民まで、当時の人々が引きおこした、実にまあ様々な事件の数々が、いろいろな資料から丹念に拾い集められていて、読まされてしまう。一例を挙げると、「江戸四谷天竜寺門前で、汚い願人坊主が二十歳位の美女を刺し殺す。恋仲だったのに裏切ったので」と坊主自供（享和元年）（この後、もう少し詳しい内容が続く）といった、まるでもう三面記事を時代順に並べてみました的面白年表なのだ。（中野直春）